

# 江西西山への巡礼

——地域ネットワークの中心

イザベル・アン Isabelle ANG (洪怡沙)

(趙婧雯訳)

玉隆万寿宮（以後、万寿宮）は、江西の主神である許遜（字は敬之、239～336/374?）信仰の巡礼の中心とされる。この巨大な道観は新建県の市場の町である西山鎮にあり、鎮は江西省の省都である南昌の南西方向約30キロメートルの所に位置する。毎年、数万人もの信徒が万寿宮に集まり、ほぼ一ヶ月もの間、許遜の天界への昇天をお祝いする。この信仰は地域社会の活動組織に支持され、また強化されながら、農村、都市を問わず、万寿宮を中心として何世紀にもわたって発展しつづけた。巡礼する者たちの流れは、この聖地のまわりの神の領域の輪郭線を形成し、巡礼はその宗教集団に対する信者の帰属意識を強化しつづけた。

本稿は、まず簡単に信仰と巡礼の歴史を概括したうえで、現在、一年を通して許遜信仰が活発な村—游家村での経験に焦点をあてる。游家村は豊城市から約5キロメートルのところに位置し、南昌の南方向の60キロメートルぐらいのところにある。この村は西山巡礼に参加している何百もの村々のうちの一つである。これらの村々の巡礼者たちは、少なくとも清朝の末期から、「会」と呼ばれる西山信仰の組織を創設し、参加した。私たちの見るかぎり、許遜の信仰に特化したこの「会」の儀式としての活動は、それぞれの村の多くの「会」の内部や相互の結束、団結力、道徳観を強固にすることに役立った。このようにして「会」とそのメンバーたちは、今に至るまで、かれらの伝統力を強化することができたのである。

# 1. 西山巡礼

## 儀式と道観の簡史

初期の伝記の原文では、許遜は医者、鬼遣<sup>おにやらい</sup>、伏龍者および孝道の模範として尊敬されていたことを明らかにしている。<sup>(1)</sup>伝記によると、許遜は若い頃、鄱陽湖あたりの聖人である呉猛<sup>(2)</sup>(?～374?)の弟子となった。呉猛は医者および蛇と龍を操る者として知られていた。つまり、かれは大蛇を殺す能力を持っており、また洪水を引き起こす龍を制御することができたのである。二人はある日、孝道に精通しているという伝説をもつ諶母に出会い、彼女の教えを受けた。彼女は許遜を跡継ぎに選び、呉猛が許遜の弟子になった。のちに許遜は長い間、旌陽<sup>(3)</sup>の県令をつとめたが、かれは誠実であり、人々の福利を気かけ、また治療家としての腕前があるということで、高く評価され役人の模範とされた。かれが西山にもどったとき、洪水をおこす龍を手懐けることができる能力で人に知られた。伝説によると、3世紀<sup>(4)</sup>のある8月15日、かれは万寿宮の境内から一族に見守られて昇天した。

東晋時代(317～420)の初期、許遜が神格化されてよりも早く、かれの旧居のあった所に、地域の聖人としての信仰の目印のために、許仙祠が建てられた。その後、その祠は道観に昇格し、空を飛ぶカーテンという意味の游帷観に改名した。名の由来は許遜が師である諶母にささげた帷<sup>とぼり</sup>に関わる。伝説によればこの帷は、許遜の住居に戻る前に、松湖に舞い降りたが、松湖は諶母の道観、黄堂宮の境内にあり、西山の東南方向20キロメートルに位置している。これらの信仰の高まりは7世紀の初頭、游帷観が廢墟となるまで続いた。その後、この道観は初唐(618～907)を画した高宗皇帝の永淳年間(682～683)の統治の間に復元された。683年、道士の胡惠超<sup>(5)</sup>(?～703)が道観を改築し、許遜を鼻祖とした孝道を復興させた。13世紀の末期まで、この教団は忠と孝の浄<sup>きよ</sup>らかで明るい道(浄明忠孝道)という名のもとで発展しつづけた。<sup>(6)</sup>

宋（960～1279）代に許遜信仰の教団はさらに拡大し、道観も大きくなった。1010年、游帷観は宮に昇格し、翡翠（玉）の繁栄（興隆）の宮殿という名の玉隆宮に改称した。1116年、宋の徽宗（1100～1125）は、それに玉隆万寿宮という新しい名を授け、扁額に宸筆で題した。同時に徽宗は許遜に神功妙濟真君（神のような功績と神妙な救済をおこなう真正の君主）の称号を与えて、かれの歴史的そして宗教的な意義を允可した。その時までには道観には、六つの大殿、五つの閣、十二の小殿、七つの塔、七つの門と三つの回廊を備えていた。

それ以後、万寿宮は周期的に破壊と再建をくりかえした。金代（1115～1234）、金（女真族）軍が南昌を占領していた時に万寿宮は破壊された。明（1368～1644）代の1582年から1584年の間に、道観は完全に再建された。1737年、道観の境域は拡大し、これを記念した石碑に刻まれている行事は今もまだそこで行われている。太平天国時期（1850～1864）、道観は再び破壊され、1867年に再建されて、第二次日中戦争（1931～1945）の時にまた半壊した。1952年から1960年の間、江西省政府は道観の修復のために頻繁に資金援助をしたが、建物は1960年代と1970年代の文化大革命の間に、すべて破壊された。1983年、新建県政府は万寿宮を観光スポットにし、それから8年間、殿とそれに付随する建築物の修復のために、絶え間なく資金を供給すると宣言した。今、万寿宮には八ヶ所の大殿と、要人を歓迎するための小殿、信者用の殿をふくむ二階建ての建物、道観が数年前に購入した食堂と道教関係者用の事務室をふくむ四階建ての建物がある。

### 巡礼の起源と発展

今日まで巡礼の歴史に関する詳細な記録はない。巡礼の起源は、いまだ明らかになっていない。しかし儀式に関してわずかな文献だけが、さまざまな宗教および歴史文書に言及している。唐代より地元や遠方からの信者たちが游帷観に集まり、許遜の昇天を祝い、道士を招いて儀式を遂行した。すでにそのとき、「西山の祭祀は大規模な宗教組織の<sup>(7)</sup>アピール」であった。13世紀

の初頭、白玉蟾（1194～1229?）は許遜信仰に関するいくつかの重要な行事に言及した。白玉蟾の記載によれば、聖人の生誕をお祝いするため、地域のたくさんの人々がこの道観に集まる。村人たちのなかで、あるものたちは醮の儀式を行い、またあるものたちは神輿を担いで聖人を尊崇し、さらにあるものたちは祈年と厄除けのために道観のまわりを「数十里」も巡り歩いた。そして白玉蟾は夏の最後の一ヶ月に行われる「割瓜」と呼ばれる、もう一つの儀式について描写している。儀式の一部として、大集団の長であり、社神の祭主である社首は、<sup>(8)</sup>許遜を祭る正殿の前に瓜を献げて、そのときの聖人に知らせ、かれらがいつ聖人をかれらの地域に招こうとするのかを告げる。それから、その後の二ヶ月間、人々は太鼓の楽団、揚げられた旗、香、花とともに道観に参詣する。かれらは許遜の六つの像のうちの四つ（道観から持ち出すことができるもの）をもって、かれら自身の地域へと行列をなしながら、もっていく——おそらく、もどる——のである。かれらは「洪」と「瑞」（現在の南昌と高安市）という、周囲にある二つの「境」の81の地域からやってくるといわれている。そのあと、かれらはともに許遜の道観に行き、そこで「醮」の儀式が行なわれる。

もう一つ重要な儀式が、白玉蟾の文献の中に記されているが、8月1日からはじまり、2ヶ月間つづく。この時期、何千人もの信者たちが、地域をこえ、旗を揚げながら、許遜を祭るために道観に集まってきたが、そのことにより、商人、茶坊、屋台が入りこむことになった。<sup>(9)</sup>この行事が許遜の昇天と関係があるかどうかについては、白玉蟾ははっきりと記していないが、かれが描いたようすは現在の巡礼活動に似ている。

白玉蟾はまた「尊崇をこめて南を訪れる（南朝＝南に朝う）」とよばれる信仰活動に言及した。8月初めに行われるこの活動は、許遜の師、謚母の道観である黄堂宮に参詣することにある。

白玉蟾はただ「不死へのエスコートである（仙仗）」を描いただけである。<sup>(10)</sup>この活動の具体的な記録は19世紀末からの日付のある『南朝紀事』に見られる。この書物によれば、「尊崇をこめて南を訪れる」は8月3日から始ま

り、そのとき、村人たちは許遜の像を持って黄堂宮に行進する。

『南朝記事』には「同社首事者、惟金田、泉珠十五姓輪行之、約三年一挙。迄明万曆間、社析為二：金田上下十姓為東社；泉珠左右五姓為西社、輪行扈蹕<sup>(12)</sup>」と記されていた。

現在、「南朝」の儀式は続いていないが、黄堂宮は現代の参拝者が巡礼で訪れる最初の聖なる目的地である。

明朝の巡礼は更に発展して、新たな段階に入った。1583年の日付のある資料である『万寿宮通志』に記録されている<sup>(13)</sup>。この資料によると、村人の長である「党正<sup>(14)</sup>」たちは、聖人の誕生をお祝いするために、万寿宮を復元しようと、南昌の知事の認可を請願した。請願書では、党正は許遜の忠誠およびかれが江西省の人々に繁栄と福を与えることを強調した。知事は請求を許可し、復興の計画に数百両の銀を与えた。道士と会首が、敬虔な一般のまた位の高い信者から資金を集めることを知事が許可した記録があった。注意すべきことは、この記録から道士と会首の密接な連携がわかるのである。会首とは一体、どのような人物であったのだろうか。資料では詳細はわからないが、かれらはおそらく地域の許遜信仰組織のリーダーたちだろう。

これらの資料はすべて、ごく初期の大規模な行事である西山への巡礼の機構とみなされる地域的な組織のリーダーの重要性を指摘している。私は当時のこれらのリーダーである社首および会首の役割は、現代の「香りの筆頭（頭香 以下参照）」に似ていると示唆したい。

もう一つのはっきりした特徴は、聖人の許遜が自分たちの地域を巡視するという訪問で、これは洪と瑞からなる81の地域のそれぞれの地方の共同体を満足させている。

今日、正殿には許遜の像が二つある。小さい方は行進に連れていくことができるが、この種の行事は今ももう許されていない。後文では、今日ではいかにして聖人の領地に境界が引かれたかを見ることができる。

『南朝記事』（前掲参照）の語り手は、少年のころ「南朝」に4回も参加したと言い、最後に「由晋迄今千五百歳、乃人之従奉許公者千載如一日、万姓

如一人<sup>(15)</sup>」と述べた。つまり許遜の信者にとって、千載は一日の如く、万姓は一人の如し、なのである。

この文章は万寿宮の巡礼が信者にとってどのような意味をもっているかをみごとに明らかにしている。儀式の細かいところは時とともに変化したけれども、地域の団体の組織はつづいて残ってきた。これらの幸運によって、幾千の信者たちが、ぞろぞろとまるで一つの身体であるかのようにみえる西山の巡礼に参加できたのである。

### 現代の巡礼

1980年代の改革開放から、玉隆万寿宮はますます多くの信者をひきよせるようになった。万寿宮への巡礼は旧暦の7月中旬からはじまり、旧暦の9月のはじめまでである。もっとも忙しい期間は、「高潮」として知られているが、旧暦の7月20日から8月1日までのあいだである。8月1日は、許遜が玉皇大帝に召されて昇天した日である。前日の夕方から当日の朝まで、道観は最も大勢の信者たちの群衆を迎える。20日に、許遜の殿である賢者の殿とよばれる「高明殿」の門は撤去される。これは人々が万寿宮の中で宿泊できるというサインでもある。許遜の像の周りは鉄柵で囲まれる。それは信者の流れが供物を神像の足もとに置かないようにするものである。

万寿宮につくと、巡礼者たちはみな、日夜、たえまない流れをつくりながら、同じ巡行コースにそって参拝するのである。まずかれらは許遜殿の前で焼香し、それから7ヶ所の殿、関帝殿、(三名の役人の)三官殿、謚母殿、(三名の純粹な神である)三清殿、(許遜の)夫人殿、(玉の皇帝である)玉皇殿、財神殿をめぐる。かれらはそれぞれの神の前で祈り、それぞれの香炉で焼香し、万寿宮の入口の前にある巨大な金炉で紙銭を燃やし、そして数多の賽銭箱に金を入れる。一方、かれらの楽団が演奏し続け、それぞれの殿の前で爆竹を鳴らす。

それから許遜の殿にもどる。その後、その他の人たちが道観やその周囲で数時間を過ごしている間、その場をはなれていくグループもある。

玉隆万寿宮で一夜を過ごすのは信者にとって非常に楽しい時間である。許遜の万寿宮が、新年を迎えるにあたり、かれらは夜をどのようにして守るかを知っているので、リラックスしている。かれらは神に献げる音楽会と劇に参加し、踊って、歌って、そして皆や神と過ごした貴重な時間を本当に楽しむのである。おもに女性である巫女（神漢と相生）は人前でトランス状態に陥り、人々はいかれらの周りに集まり、からかったり、笑ったりしながら許遜や他の神々に問うが、許遜たちは巫女の声を通じて大声で答えるのである。<sup>(16)</sup>

これらの人たちが道観の同じ巡行コースにしたがって、同じ情熱をもって同じ身振り手振りをすると、かりにかれらに言葉などによる伝達がなくとも、それぞれがお互いに心を通いあわせることができているようにみえた。

#### 巡回に参加する信者の団体

祭祀に参加するさまざまな種類の巡礼のグループは、本籍、血縁関係および、それらの大きさで何種類かに分けられる。何百人もいるグループもあれば、10名そこそこのグループもある。私がみたあるグループは千名を超えていた。巡礼グループの特性や構成から分析すると、三種類に区別することができる。巡礼のグループの第一のタイプは家族や友人の少人数からなり、かれらの大半は南昌や近隣の県からやってきて、道観ではあまり時間をかけない。それらの小さなグループのいくつかには高級官員とその妻子たちで組織されたものもあり、かれらはピークの前にピカピカのリュウジンでやってくる。

第二のタイプは江西省の市や県、たとえば豊城、樟樹、贛州、高安、安義、宜春、鄱陽など、あるいは他の省から参加する道観組織である。1987年の紀年のある石碑<sup>(17)</sup>には巡礼に参加したことのある15の省の人々の名前が載せられている。名簿には近くの省、たとえば福建、浙江、湖北、湖南、広西だけでなく、遠くの省、たとえば河北、広東、貴州も含まれている。このような道観の団体は、しばしば信者の組織のために儀式を行う道士あるいは

仏教の僧侶に連れられて到着する。

巡礼グループの第三のタイプは豊城市の農民で組織されている。それぞれのグループはすべて特有の旗と木製の龍をもっているため、私はいかれらを「龍会」と称している。1994年、私がいじめて巡礼に参加した時、「龍会」のほとんどは、小作農の巡礼で構成されていた。しかし、その後の数十年間、「龍会」の構成は変化し、農民たちの多くは、近くの町や他の省で農業をするようになった。今も村に住んでいる人々は組織の巡礼や儀式に参加している。遠いところで働いている人たちは今も組織の一員だが、新年を祝う時に戻るだけである。

### 「龍会」

道観には2007年から2009年までの詳細な記録があり、「龍会」の一部として万寿宮に参詣した巡礼の資料を備えている。この二年間、玉隆万寿宮の道士は事務室で登録させるためにかれらに尋ねた。かれは来年からの会の到着を公平に区分しやすくするために、会の名前、住所、到着の日にち、参加した人数、リーダーの住所と電話番号を書きとめた。この過程で、かれは249組、合計1万7771人の構成員を記録した。これらの記録に2009年以降のものはないが、我々は現存の資料を通して、聖人の領地に対して、全体的な洞察を分析することができる。同じ道士はまた2009年には、500から600組、(4万から5万人)の信者が巡礼に参加した、と私に告げた。

これらの資料により、これらのグループの大半は、江西省北部の農村から来たことがわかる。かれらの大半は豊城市からきている。あるいは樟樹市の大きなグループ、または鄱陽湖地域からきたかなり大きなグループである。これらのグループは共通点をもっている。かれらは贛江に沿っているか近くであり、広くはりめぐらされた水路のネットワークにつながっている贛江の水域に位置している。

「龍会」は通常、村の男女の年長者、龍を挙げる人もしくは頭香(先頭で香を捧げる人)、旗(旗の先頭に、会の名前がみえ、上から下に「万寿進香」の四文字

がある。それは長寿をねがい万寿宮に香を献げる、という意味である)、神像(許遜、時には自身の村の神々)を担ぐ人、赤い旗を挙げる人、伝統的な音楽家たちの楽団(銅鑼、鼓、鑊鉞<sup>にようはら さない</sup>、唄、二胡、笛)、時には女たちが構成した金管楽器や鼓の楽団、そして一般的な信者を含んでいる。人々はみな、「万寿進香」と書かれた赤または黄の兜肚<sup>ほらまき</sup>をつけている。女たちはしばしば髪に、許遜自ら植えたとされる、許遜殿の前にある巨大な1680年の樹齢を持つ柏の枝を飾る。

「龍会」は、たいてい万寿宮で何時間も過ごす。2012年、私がある会についていったとき、私たちは午後2時に到着し、14時間後にやっとそこを離れた。信者たちは大量の香、紙銭、爆竹、ばかでかい蠟燭、その他、および油・果物・タバコなどの供物をもっていく。万寿宮に巡行するやいなや、かれらは自分たちの龍を高く挙げて、横断幕とかれらの神像を神の足元に置いた。そして、身の回りのものを壁に沿って置き、外に出て晩ご飯を食べる。そして道観で夜を過ごすためにもどってくる。許遜の殿に場所が足りなかったら、他の殿に行く。かれらの話によると、万寿宮で長い時間を過ごすほど、より多くの利益を得られるという。

### 玉隆万寿宮の壁額

巡礼に参加する会は、かれらの宗教的そして社会的伝統を代々伝えてきたが、私たちが自由に使える資料は20世紀の初期までしか遡れない。400個を超える石の壁額が万寿宮にある8箇所<sup>(18)</sup>の殿の外壁に飾られている。最も古いものは1908年のもので、もっとも新しいのは2010年のものである。もっとも古い壁額には団体(以後、会と称す)の名前しか書いていないが、平均すると、一つの石板には132(33列4行)の名前が書かれている。一方、最近の壁額には寄付した人の名前を目立つようにしている。全部の壁額に、寄付した人がどの会に属するかと、寄付の金額が書かれている。注目すべきは、道士によって記された2007年から2009年の記録に、壁額に見える、たくさん<sup>(19)</sup>の会の名前を見ることができる点である。

これらの記録によって、それらの会は、前の世紀には宗教の信者と活動を迫害する事件が絶えなかったかにもかかわらず、少なくとも 20 世紀の初頭にすでに存在していたことが証明できる。壁額には、村で作られた会の名とは別に、経済的な観点とそれと同じくらい政治的な観点からの、プロの会社であり、強力なギルドである会の名前も含まれている。乾隆（1736～1796）時代から、強力な商人と数多くのギルドが玉隆万寿宮の拡張と継続的な修復に活躍していた。<sup>(19)</sup> これらのギルドは、まったく独自の方法で商売をし、地元の信者団体と広範囲につながっていた。<sup>(20)</sup> 「開帮会」と称する商人たちの協会の本拠地は豊城市にあった。このギルドは西山への巡礼も組織している近くの信仰の会を統一した。ギルドはそれぞれの会が西山に到着する時間帯を調整し、万寿宮の治安の維持の管理をまかせていた。<sup>(21)</sup> 1949 年からギルドは禁止された。しかし信仰の会は、まだ存在し、活発に活動している。私の行っている游家村についての研究（後述）が、この事実の成因を理解することに役立つと思う。

### 万寿宮の現代の管理

万寿宮への巡礼は 1984 年の復活から、着実に人気が増してきた。復元プロジェクトが始まってから、多くの人が寄付し、かれらの名前が石に刻みこまれた。道観の修復と再開放の公表は、新聞はもちろんのこと、メディアやテレビによってなされた。1990 年代から 2011 年までの間、道観の管理者はすべて南昌の政府で役人を勤めてきた共産党員であり、道観を管理するために西山に派遣された者たちであった。2011 年、道士が新たな管理者となった。すなわち、道士が万寿宮の代表となっているのは、西山の道士が外国に招かれるのと同じぐらい、とくに西山で重要な催し（たとえば外国の道教徒の代表団の訪問などの儀式）があるときには重要である、ということなのである。道士が管理者になったのは、宗教政策の変化および道教が中国の伝統と文化の基本的な要素として認識されることを援助している中国の正式な道教協会<sup>(22)</sup>の努力とも明白に関連している。

約 20 人の道士が道観に所属している。道士たちは村の会と宗族の宗教的な集まりのために儀式を主催する。この中の数人がまた道観を経営する。かれらは許遜を鼻祖とする浄明道派に属する。かれらは道観に住まず、結婚もできる。道士たちのあるものは会のリーダーと関係を保っている。かれらは時々、会のリーダーを訪ね、万寿宮に参詣することを勧める<sup>(23)</sup>。

### 万寿宮の名声

万寿宮は積極的な宗教復興の原動力である。この復興は当地と省の政府から道徳的にまた精神的に激励された。つまり宗教活動が合法化されたということである。巡礼者からもたらされる莫大な寄付金のほとんどを受けとるが、それは非常にありがたいものである。このお金の一部分で万寿宮を修繕し、その荘厳さはいや増しに増した。寄付などを募ることは、1 年を通して行われ、とりわけ贈り物や儀式の作法、小さな装飾品が売買される巡礼の時期は、非常に重要な活動である。道観の管理者は、雑役をする人たち（道士を除いて約 20 人いる）に払ったり、道観の維持と修復に用いる金銭を管理する。管理者の役割は、南昌や新建県の政府、宗教の事務局、警察署と友好な関係を維持することにもある。

道観が何世紀にもわたって人気を博していたという名声こそが、くり返し破壊される期間があったにもかかわらず、また修復されるということの本質的な要素なのである。強力な神であり、同時に鬼遣、医者、洪水の神、および孔子の価値観に影響を受けた道教学派の鼻祖の崇拜の場所として、ここは健康、治療、商売繁盛、豊作をそれぞれ祈る、または会のメンバーの夢を叶えるように祈る重要な場所である。唐代以来、道観は皇帝に允可されている。当時、勢力のあった道教徒の努力、そして現代の道教徒による近隣の会や組織の人々への儀式の提供の結果、この道観は魅力を増した。最後に遅くとも明代以来、道観は信仰もしくは貿易の重要なネットワークの中心であり、数千の村と道教協会をふくむ「神の領域」の拡大を促進した。それこそが我々が後文にみえる、信者団体がこの復興を通して生き返る方法を検証す

る際の、地域の生命力の強さのポイントである。

## 2. 游家村

### 游家村の信者

游家村の村人たちの経験は、巡礼が信者の生活の中で行われる重要性を証明する手助けになる。

私は1994年の巡礼中にこの村の人々に会った。かれらは印象的な横断幕と龍をもった数百人の老若男女たちだった。かれらは密集した群衆の中を、許遜の殿に駆け上がるように階段を上がった。かれらに招待されたとき、私はほんの少しもためらわなかった。しかし、これらの最初の非常に強い印象よりも、いくつかの「龍会」があったことが、この村を選んだ理由である。游家村は豊城市地域の最も大きい村の一つであり、市街から5キロメートル離れているが、かれらがいうところの「第一の村」である。村は贛江の右岸にある。かつて贛江は堂々とした大河であった。今日では、かつての幅の十分の一に減ってしまった。唯一の長所は洪水が少なくなったことである。ほぼ反対の対岸には、緑におおわれた剣の邑の万寿宮（<sup>(24)</sup>剣邑万寿宮）がみえる。伝統的な住宅のいくつかは百年前に建てられており、そのほかはもっと新しく1970年から1980年の間に建てられているが、しだいに現代的な建築に囲まれるようになった。

1987年に復刻された堂々とした家譜（36巻もの厚さがある）によると、游氏の一族は6000人以上おり、1485年からここに住みついている。それぞれ36世代にわたって連綿と続いている。游氏一族は現在13房（支族）で構成されている。游氏は、村の南大門にある新築の巨大な先祖の寺（祠堂）に先祖を祭る。その建築費用は5～800万元に及んだ。地方政府はその事業に融資することに合意し、村の男たちはみな寄付する義務があった。地元の神々と許遜を祭る道観は、贛江の岸に沿った村の東側に位置している。

1990年代まで、村人たちのおもな仕事は農業、漁業と川に沿っての荷物

の運搬であった。いまは仕事として土地を耕す農民はほとんどおらず、村民は「年寄りだけが、まだ土地を耕やしている」と言っている。しかし、実際は村人はみな多かれ少なかれ、自分で食べるものをつくるためのわずかな土地をもっている。漁船の数は激減した。川に沿っての運搬は川底で砂を採掘することと関わり、村で働いている男たちのおもな仕事となっている。男たち（300から400人）の多くは出稼ぎに行き、とりわけ広東省や海南島で衣類の行商をする。しかし、かれらは、ふつう三世代の家族が住むことのできる数階建ての家を建てるために游家村にもどってくる。村の発展は、この20年に満たない期間の変化によってはっきりとわかる、ということに気づく。

### 游家村の「龍会」

游氏の一族には五つの龍会がある。原則として各家族（戸）の最年長の男性が戸の代表者で、会への参加はかれの選択で決められる。女性は入会を認められていない。村の約90%の戸は会に属している。それぞれの会は、その会のチーフである会長によって指導されるが、香のチーフでもある「頭香」とも呼ばれ、年ごとに交代する。

会を構成している戸は、それぞれのチーム（班）に分散している。会の記録簿（会譜）には戸の代表者の名が記録され、交替で頭香になる班によって一覧表にされた。たとえば、もし会がそれぞれ24戸を含む二つの班を持つならば、会長が回ってくるのに48年間かかることになる。戸の代表者が亡くなったときは年長の息子が跡を引き継ぐ。

それぞれの会で各チーム（班）は、会長の家で開かれる儀式と宴会の準備を、まわりもちで任される。会長がリーダーシップをとる間、その家は祭壇の上に像と龍を置く許遜の像の家になる。会長は神に香とさまざまな供物を供える責任を負う。会長は、また宴会、村の信者の世話、西山へ行くためのバスのレンタル、巡礼者たちへの食事の提供の支払いをしなければならない。班のメンバーも儀式の活動のためにちょっとした寄付をしなければならない。それぞれの会の中での規則には、会長は宗教活動の組織に責任があ

り、喧嘩をしないようになど高潔にふるまわなければならない、と定められている。そのかわり許遜は、たとえば会長を自分の息子と認めることによって、かれのよい行為に報いるだろう。その上、かれの戸のメンバーもまたこの一年間、許遜の庇護のもとにあるのである。会の長であることは、班や村の中で名誉あることだという効果をもつ。会長は、お金、責任の自覚、組織化させるための才能をもたねばならない。会長もちまわり制のおかげで、村のほとんど全ての戸は会長になりうる特権を得るが、それはたしかに経済的で社会的な刺激である。

儀式の活動の中での五つの会の順位は、それぞれの会がいつ創られたかという日付けにもとづいている。最も古いものは、永遠の平和の会という意味の游永寧会である。この会は300年以上の歴史があるとされ、104戸ある。第三の会は、永遠の至福の会という意味の游永福会だが、最も大きい会であり、5つの班で175戸ある。第四の会は、永遠の生命の会という意味の游永生会であり、おもに漁師たちで構成される。このため、ふだんは村人たちから漁師の会、「漁民会」とも呼ばれている。漁民会以外の他の会は、みなが同じ職業のメンバーからなりたっていない。

游家村の近くには、千人を超える大きな信者の団体、王氏がある。王氏は、游氏と同じ時期に、そこに住み着いたといわれている。游氏と同様に、王氏も自らの龍会である王永勝会（王氏の永遠に勝れた会）がある。いくつかの100戸以上の戸を含むこの会は4つの班に分けられ、王氏の会は村の中では六番目にランクされる。会は独自に活動をしており、游氏一族の会の活動には干渉しない。

### 会の年度儀式

会には一年につきの四つの重要な行事がある。1) 春の祭祀（春節） 2) 玉皇<sup>(25)</sup>の生誕 3) 許遜の生誕および 4) 許遜の昇天。

#### 1) 春節

この日、会員は朝5時に起き、家でそれぞれの祖先を祀ってから会長の家に行き、許遜に敬意を表する。メンバーは香木、蠟燭、紙銭をもっていく。会長はタバコ、ビスケット、お菓子などを会員たちに提供する。これは、会長の家で行われるその年の最も重要な行事である。

## 2) 玉皇大帝の生誕

玉皇大帝の誕生日は旧暦の1月9日である。村全体が、許遜を除いて、村内を神輿で運ばれる道観の神々の、年に一度の行進に参加する<sup>(26)</sup>。行進のコースは一族の年長者によって決められる。行進の始まる前に、神々の輿は村の中心に当たる神聖な池（神塘）の前、村の四角い広場に置かれる。会にとって班の交替が行われている期間は重要な日である。游家村の五つの会は、許遜の像の移動と会長の交替をとりおこなうために、四角い広場に行く。新旧会長は、会員全員と一緒に、他の神々の輿の後ろ一列に、許遜像が置かれるテーブルを設置する。聖なる池に面して、五つの会は左から右に年齢の順、つまり創立の年月にしたがってならぶ。会員たちが香をささげ、鉦や太鼓をたたき、そして村の神々にお辞儀する。そして会員たちは、神々の行列が村の小道を通り抜けるはじめるあいだ、許遜の像、楽器を持って、かれらの会の新しい会長の家に行く。

## 3) 許遜の誕生日

許遜の生誕のお祝いは1月25日の夕方からはじまるが、その食品の購入、音楽、テーブル、料理を計画するため、会長の家で準備の会議が行われる。宴会は許遜の誕生日である27日に開催されるが、会長はその経費のすべてを支払う。

27日の朝、会の横断幕は会長の家の前に貼り付けられ、香炉と紙銭を燃やすための容器が部屋の外に置かれる。班のメンバーは許遜のための香、蠟燭、紙銭、爆竹と元宝（インゴット）を持って行く。部屋の中には、木製の龍が壁に掛けられ、宴会用のテーブルが設置されている。許遜の像は一年間

テーブルに置かれ、その間、会長は毎日焼香する責任がある。記念行事の間、村の道士は五つの游氏の会と一つの王氏の会を、最も古いものから順に訪ねる。

会長の家で「ひしゃく(斗)の崇拜」<sup>(27)</sup>と呼ばれる儀式を行うが、会長は許遜の祭壇に果物、調理した豚肉と魚、ご飯、蠟燭、香などの供物を置いておく。テーブルの一隅に会の記録(会譜)を置く。会の4、5人のメンバーが儀式に同行するため、鉦や太鼓を演奏する。

この儀式は半時間続く。会長は道士の左に位置する。最も際立った儀式の行動は、道士による、会譜に書かれた班のメンバーの名の読みあげである。<sup>(28)</sup> それぞれの名で、それぞれのメンバーの運命を知るために、かれは二つの占用の塊〔訳者注 ポエ(筭)のこと。赤く塗られた半月形をした二つの木の塊〕を地面に投げる。塊を投げるたびに、周囲の人たち(数人の女性が出席し、儀式への参加は許されているが、会のメンバーではない)は大声で吉がでるのを塊に頼むように、「Shungao シュンガオ(順高)」と言う。会のメンバーは火のついた線香を一本ずつ道士に手渡し、道士は許遜にお辞儀して班のメンバーの数と同じだけの線香を生米の入った容器に挿す。雰囲気は活発で、とてもよく、だれもがすばらしい未来を求める機会として祝賀会は行われていく。

その後、道士は他の五つの会で同じ儀式をとり行う。

それぞれの班のメンバーは許遜へのお供えをもち、会長を手助けするにとどまる。儀式がおわったあと、地域社会全体の宴会をする。

#### 4) 許遜の昇天

7月27日から8月1日まで、会は許遜とかれの戸(42名と、犬やめんどりたち)の昇天をお祝いする。4日間は、この行事を祝うために必要とされる。

##### a. 7月27日に行う儀式：仙人になる(安仙)。

この儀式は会のメンバーの断食(封齋)<sup>(29)</sup>の始まりであるが、8月1日の宴会でそれは終わる。1月27日と同様に、道士は傍らの会長とともに6つの

会で儀式を行う。木製の龍を所持している会は、それを許遜の祭壇に置く。

道士は班のメンバーの名を読みあげる。道士が去ったのち、メンバーは会長によって運ばれる龍、横断幕、許遜の小さな像を手にとる。そして村の神の殿の右側にある万寿宮という許遜の大きな木製の像がある道観に香を献げるために行く。それから、かれらは土地公に香を献げるために村を一回りする。土地公もまた村の領地を治める天界の役人である。<sup>(30)</sup> それらのうち四つは村と贛江の間の高くなった堤防に置かれ、一つは古木の下に置かれ、そしてこのりの二つは家々のそばの田畑にある。

この儀式の間に、それぞれの会は、神のネットワークの一部分である地域に根ざしている許遜崇拜の巡礼の会としての立場を再確認する。

#### b. 7月28日 西山への巡礼

1996年から数年間、游家村の人々と西山の商人たちとの間の争いのため、游家村の会のメンバーは、「女、老人、子ども」を除いて、西山に行く権利を失った。数年後、万寿宮の道士が游家村の会に西山にもどる（正確には数百人が巡礼することを意味する）ように勧めたが、うまくいかなかった。

今もなお游家村の巡礼者は、西山の玉隆万寿宮より、贛江の対岸にある劍邑万寿宮に行くことを好む。

朝7時、女と老人たち（2012年には、7両の長距離用大型バスで約250人）は、大型バスに乗る。バスには赤い布の大きな飾り結びで飾られた手書きの幕がつけられているが、一つは「万寿進香」と書かれ、もう一つには村の名が書かれている。西山に行く途中、バスが橋をわたる時、道観のそばを通りすぎる時はいつも男が地元の神々に会が西山に向かっていることを知らせるために爆竹を外に投げる。小さな打楽器の楽隊はほとんどずっと演奏しており、それで、どの町でも游家村からくるバスの連なった列を見聞きできる。かれらは許遜の師である諶母をまつる黄堂宮を通り、それから仏教の山である夢山に行き、昼すぎぐらいに万寿宮に到着する。2時くらいに、二人の道士が手伝って、游家村の数名の村民たちが許遜像の衣服と冠を取りかえる。これ

らの豪華な衣服は巡礼者の寄付によるものである。この習慣は游家村の会によって代々、伝えられてきた。

たとえ会のメンバーが西山に行かなくとも、游氏の数人のメンバーはこの重要な習慣<sup>(31)</sup>を実行する。游氏は翌朝、5時に西山を離れる。

c. 7月29日の剣邑万寿宮への巡礼

道士とともに游家村の五つの会は整然と列をなし、贛江の上にかかる橋を横切る前に堤防に沿って、最古の剣の邑<sup>むら</sup>の〔剣邑〕万寿宮に行く。男たち、老人、若者、そして髪にイトスギの小枝を飾り結びした女たち、約200人がいる。会長は龍を運び、他のメンバーたちは許遜の小さな像、横断幕、大量の香、蠟燭、紙銭をはこぶ。打楽器の楽隊はかれらとともに行く。道士は許遜の殿で儀式を行い、会のメンバーの名を読みあげる間、龍たちは南面している許遜の像の左右に高く掲げられる。

帰り道、会は村の廟に行き、最も古い会が許遜の廟に最初に入る。だれもが廟の前の大きな香炉に香を挿し、許遜の像の前で同様に香を献げる。そして、めいめい火のついている香を家にそなえるために2、3本取りもどす。それは「香を返す」回香と呼ばれ、許遜信仰の集団に全ての戸が所属していることを象徴している。

d. 8月1日に行う「仙人となって別れを告げる」儀式（謝仙）

道士は6つの会で儀式を行うが、最初にもっとも古い会を訪れる。龍は祭壇に置かれる。儀式の終わりに会のメンバーは龍と横断幕をもって「河の岸」に行く。実際には、かれらは会長の家に最も近い汀<sup>みぎわ</sup>を選ぶ。道士は短い儀式を行い、そのあと横断幕は巻かれ、龍は後部に運ばれ、みな会長の家に戻る。それは断食の終わりと宴会の始まりの合図である。

年間を通じての会の儀式の活動は、共同体のつよい紐帯を強調する。それぞれの会のなかで、メンバーたちは細心の注意をもって、来たるべきイベントを企画し、準備する仕事を分担する。通常の儀式では、すべての会は誠実

に年功序列に敬意をはらう。このことは共同の宴会のあいだも強調される。

会の利益のために行われた道教の儀式は、とくにメンバーの名を読み上げるときに、結束した信仰団体への帰属意識をつよくすることに重要な役割をはたしている。会の中での責任の交替は、儀式のもう一つの重要な側面である。

それは経済的な刺激として働く。というのは会長は儀式と宴会の日々のために多くのお金を使わなければならないからである。そのうえ、メンバーの名すべてが会譜に載っているため、交替はメンバー全員にこの名声のある地位にあがることを可能にする。儀式の活動はまた会長に品行方正な態度を要求する。かれはメンバー全員に知られている、高い道徳の規則を年がら年中、尊重しなければならない。かれはまた会の儀式活動を順調にすすませる責任がある。

最後に、これらの共同体は地方政治の力と一族の指導的な権威から独立して行動する自治の実際のやり方をもっている。道士は基本的な役割を行う。かれは道教信者の儀式に参加するため会長を招いて、一年間、信仰のチーフとして定着させる。しかし道士は7月27日、会長たちが許遜を崇拝するため、また村のあちこちの土地公たちに香をささげるため、村の廟に行く日には、会に参加しない。この巡行は会員たち自身の場所、かれらの領域を定めることであり、会だけに関わることである。

## まとめ

一族の村だけではなく、西山での許遜崇拝の復活に関する私たちの簡単な概観により、江西省にまだ存在する地方の共同体のネットワークの重要性がわかる。江西は許遜の領地である。万寿宮の周辺に根づいている許遜崇拝のネットワークは、万寿宮の石の壁額にみるように何十年もの間、巡礼の会のなかで実際に行われている。巡礼の間、人々が「完善〔真〕なる君主、許（許真君）は、我が江西〔省〕の幸福の君主（普天福主）である」と誇らしげ

に叫ぶのをしばしば聞く。

私たちは豊城市区の「龍会」の、団結、道徳、相互の援助、自治権によってしっかりと組み立てられているようにみえる組織の基本的な特性と地方の団体の儀式に焦点をあてて取りあげた。かつてのギルドは姿を消したかもしれないが、会はまだ数多くある。「廟の祭り」(廟会)による巡礼の復活は、玉隆万寿宮それ自身のためだけではなく、江西省のいたるところにある他の万寿宮のため、さらに宗教的共同体の活動を再び始めた何百の村々のために、とても重要な経済的、社会的な影響があった。

一つは主要な道観レベル、もう一つは村レベルという、二つの取り組みが宗教問題に関しての重要なコントラストとなっていることは明らかである。つねに公的な地位を享受している西山の万寿宮は、国との関わりで、指導者と同じくらい、その管理に関しても多くの変化を経験した。

他方、経済的に大きく発展してきた游家村では、宗教問題はまったく異なる観点であらわれる。一年に規則的な変化を与え、村の力強さを増す、儀式、断食の日数、宴会の日数が変わらなかったように、異なる「宗教の行為者たち」の間の関係もほとんど変わらなかったように思われる。

游家村では儀式に参加する人々のほとんどが年配の男女である。出席している若い人々は会長たちである。もしかれらが村の外で働いているなら、かれらは数日、休みを取らなければならないが、少なくとも道士が活着ている間は引き継ぎがれていくのである。

#### 【参考文献】

- AKIZUKI Kan'ei 秋月観映著『中国近世道教の形成：浄明道の基礎的研究』1978、東京、創文社
- BOKENKAMP, Stephen R. 2008. "Lingbao." In *The Encyclopedia of Taoism*, edited by Fabrizio Pregadio, vol. I: 663-669. London: Routledge.
- BOLTZ, Judith M. 2008. "Jingming dao." In *The Encyclopedia of Taoism*, edited by Fabrizio Pregadio, vol. I: 567-571. London: Routledge.
- BOLTZ, Judith M. 1987. *A Survey of Taoist Literature: Tenth to Seventeenth*

- Centuries*. China Research Monograph 32. Berkeley: University of California, Institute of East Asian Studies.
- JIN Guixin 金桂馨, Qi Fengyuan 漆逢源. 『万寿宮通志』 1878、現行版: 南昌: 江西人民出版社 2009
- KONG Linghong 孔令宏 and Han Songtao 韓松濤. 『江西道教史』 2011、北京: 中華書局
- LI Pingliang 李平亮 「宋至清代江西西山万寿宮象徴的轉換及其意義」 道教研究 『宗教学研究』 2012 (3): 2-3
- SCHIPPER, Kristofer M. 1985. "Taoist Ritual and Local Cults of the T'ang Dynasty." In *Tantric and Taoist Studies in Honour of R. A. Stein III*, edited by Michel Strickmann, 812-834. Brussels: Peeters, Institut Belge des Hautes Etudes Chinoises, Melanges Chinois et Bouddhiques, vol. 22.
- SCHIPPER, Kristofer M. and Franciscus Verellen (eds). 2004. *The Taoist Canon: A Historical Companion to the Daozang*. Chicago: The University of Chicago Press.
- SCHIPPER, Kristofer M. 2008. *La religion de la Chine: La tradition vivante*. Paris: Fayard.
- Xiaodao Wu Xu er zhenjun zhuan* 「孝道吳許二真君伝」 『道蔵』 449 (上海書店, 1996). Yulong ji 『玉隆集』 『修真十書』 『道蔵』 263.
- ZHANG Wenhuan 張文煥 『万寿宮』 2003 北京: 華夏出版社

【注】

- (1) 許遜の信仰および教団の歴史研究については、秋月観映 1978、Kristofer M. Schipper 1985: 812-834 及び Judith M. Boltz 1987: 70-78 を参照。
- (2) 鄱陽湖は南昌の東北約 70 キロに位置する。
- (3) 四川省徳陽あるいは湖北省にある。孔令宏と韓松濤は他の研究者と同意見で、旌陽は荊州（今の湖北、枝江市の北）に位置するとみている。孔令宏・韓松濤 2011: 41-46 を参照。
- (4) 年代について、一般的には 374 年と認定されているが、Schipper (1985: 822 n18) は 336 年の可能性を提示している。
- (5) Schipper (1985: 828) が指摘するように「唐代において孝道は、イデオロギー的な思潮や教団ではなく、靈宝の伝統の普遍的枠組みの中にあつた地方的な流派である」。
- (5) Judith M. Boltz 2008: 567-571 を参照。

- (7) Schipper 1985: 827-829, 832; 『孝道呉許二真君伝』、『道蔵』449 (北京、上海と天津、1988、三家本)、vol.6、843 頁。
- (8) この文脈で「社」は、数戸からなる「村 (village)」も意味する。
- (9) 白玉蟾『玉隆集』(『修真十書』所収)、『道蔵』263、31~36 巻、vol.4、763 頁。
- (10) 人々は旗、武器、傘、扇子などを手に持つ。
- (11) 金田と泉珠と呼ばれる小さい村は今も存在する。金田は玉隆万壽宮の東南 1 キロに位置する。泉珠は玉隆万壽宮の西南 1.5 キロに位置する。
- (12) 「社神の祭主である社首につきしたがう人々は、金田と泉珠から参加した 15 の氏族の責任者であり、彼らはそれぞれ三年ごとに交替して参加する。明の万暦年間 (1573-1620)、社は二つの部分に分かれていた。「上金田」と「下金田」の十の氏族が「東社」になって、「左泉珠」と「右泉珠」の五つの氏族が「西社」になっている。彼らは交替して聖人の神輿を護送する。』『万寿宮通志』所収「南朝紀事」、金桂馨・漆逢源 1878 (江西人民出版社、2009 年版)、11 巻 177 頁。李平亮「宋至清代江西西山万寿宮象徴的轉換及其意義」『宗教学研究』2012 (3): 2-3。
- (13) 『万寿宮通志』所収「胥太尊給募縁簿」金桂馨・漆逢源 1878 (同前) 20 巻、381-382。李平亮 2012: 2。
- (14) 「党」は一つの行政単位あるいは村であり、500 戸からなる。
- (15) 『万寿宮通志』所収「南朝紀事」、11 巻 178 頁。
- (16) 二十年前は違っていた。このような活動は非公開で、殿の外壁に隠れており、彼女らが何を話しているかは、近づかなければ聞こえなかった。
- (17) 万寿宮の石碑に関しては後述する。
- (18) 巡礼団体は一般的に「進香会」と呼ばれる。信者は神々に献げるためのお香を持参する。後述する游家村のように、「会」は、寄付金を出し、いろいろな祭儀で役割を持つような信徒からなっており、その寄付金で信徒たちをみずから管理している。「会」の生成と発展については、Schipper 2008: 157-160 を参照。
- (19) 李平亮 2012: 4。
- (20) 1949 年以前の北京で経済的及び政治的な作用を果たしたギルドの例については、Schipper 2008: 358-361 を参照。
- (21) 私はフィールドワーク調査で游家村の年長者からこうした談話を採集した。豊城県には 14 基の古碑があり、1716 もの「会」の名称を伝えている。ある碑には游家村由来の 4 つの「会」の名称がみられる。
- (22) 中国道教協会は 1957 年に成立、文化大革命の時に一時休止され、1979 年に

活動を再開した。

- (23) 江西省には、他の万寿宮が多くあって、許遜を祭っている。張文煥（2003: 189）によれば、万寿宮と呼ばれる道観は565もの町にある。一部の会は自分の住所に近いところにある万寿宮での進香でお勤めをしようとする傾向がある。
- (24) 劍邑は豊城の別名である。
- (25) 玉皇は、天の帝であり、神々の主である。
- (26) これらの神々の中で、最も重要なのは天符大帝である。彼は游の氏族の神ではあるが、豊城の他のいろいろな村でも崇敬されている。毎年、游家村の男性が一人、大金をはたいて、これらの神を自分の家に二週間にわたって置いておく。この期間、神像を日夜看る助けが必要なため、氏族の支流（「房」）の人と交替しつつ神像を見守る。
- (27) 拝斗の儀式は、共同体の利益と同様に、個人の利益のためにおこなわれる道教儀礼である。個人は長寿、幸福、厄除けを求める。共同体のために道士がおこなうことといえば、例えば神の誕辰をお祝いする拝斗がある。北斗七星は人々の運命を扱う。また「斗」は、信徒の生米の献呈する量をはかるだけでなく、北斗七星の形を調べるものでもある。
- (28) 本文の目的は儀式を詳細に記録することではないから、最も注目されるところだけを選んだ。
- (29) 封齋の期間には、人々は肉食しない。
- (30) 人々は大地の神を「土地公」と称する。彼は「村の標準的良き守り神」で、「人の生存空間を設定し境界を決め、未開の土地の荒らぶれた力を制御する」神である（Schipper 2008: 350）。
- (31) この点に游氏がほかの団体より優越していることが見てとれる。この優越は、豊城の他の村にくらべて、会の数の多さや村の発展度などから証明されるように、游氏が少なくとも半世紀のあいだ形成してきた経済力に関わるものであろう。